

# ふくしまHIGH SCHOOL ACADEMY2023

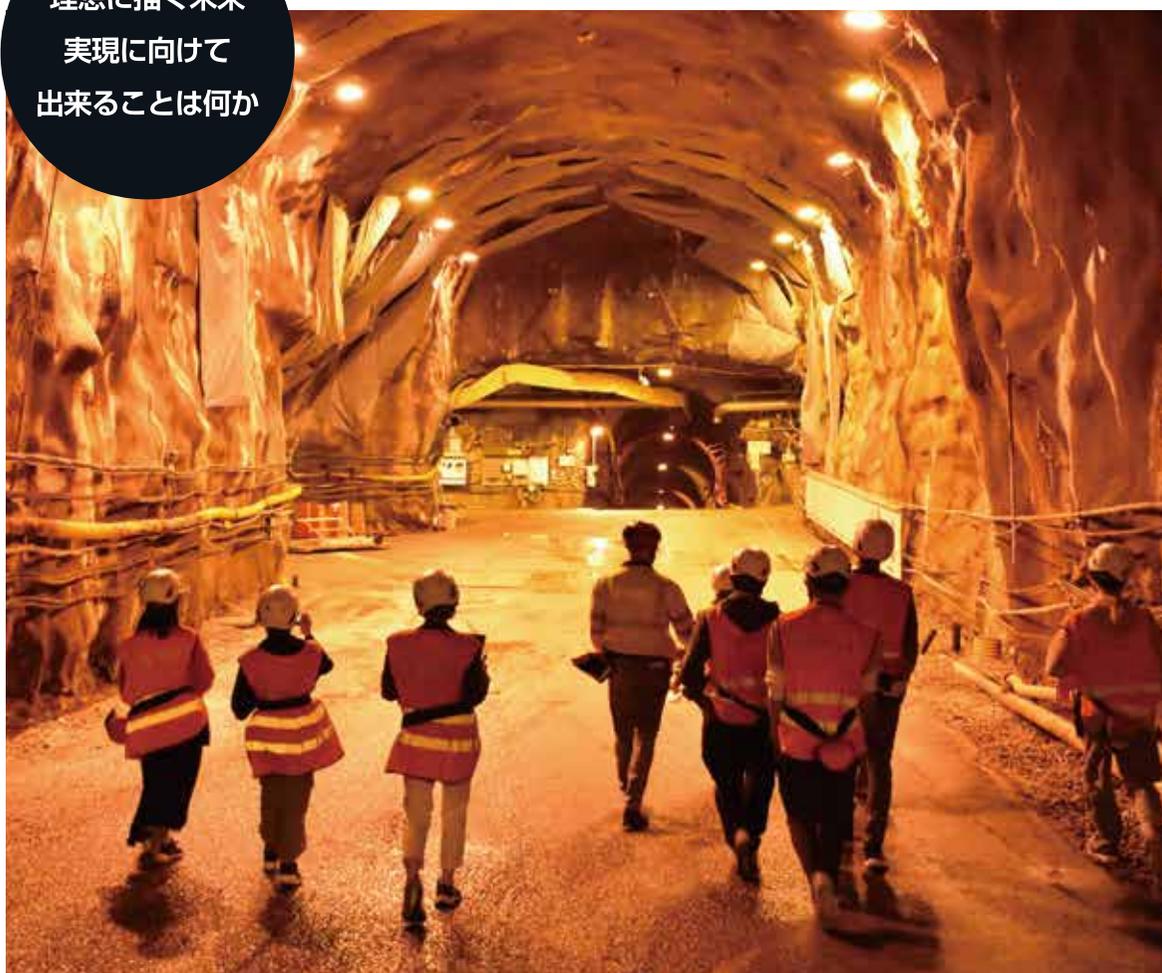
2023.8/2→9/18 活動報告副読本

## 高レベル放射性廃棄物 (核のごみ)処分について



## 高校生がスウェーデンや 青森、福島取材して考える

理想に描く未来  
実現に向けて  
出来ることは何か



P1~P2	スウェーデンと青森・福島へ 核のごみ処分の行方を追って!
P3~P8	『ふくしまハイスクールアカデミー 2023』報告会 第1部
P9~P16	『ふくしまハイスクールアカデミー 2023』報告会 第2部
P17~P18	『ふくしまハイスクールアカデミー 2023』報告会 講評
P19~P21	<b>特集1:「当事者として伝えること・伝わること」</b> コミュニケーションと当事者としての発信 磐城桜が丘高等学校 太田 諒
P22~P24	<b>特集2:新たな考え方と『自分ごと化』</b> 先の見えない未来のために現状と向き合う 原町高等学校 大井 紀葉
P25~P28	<b>最前線~この目で確かめる~</b> 「先進地スウェーデンに学ぶ」、「青森・福島の現状報告」
P29	高レベル放射性廃棄物 不可避の課題
P30	スウェーデンに学ぶべきことは
P31	私たちが未来を描くためのキーワード
P32	編集後記



### 参加者リスト

#### ● 高校生

- |  |  |
|--|--|
|  伊東 聡太 (福島県・相馬高校)    |  蛭名 翔大 (北海道・寿都高校)   |
|  鹿山 成美 (福島県・原町高校)    |  中山 凌空 (北海道・寿都高校)   |
|  大井 紀葉 (福島県・原町高校)    |  大屋 晃平 (青森県・六ヶ所高校)  |
|  大川 夏輝 (福島県・磐城高校)    |  野田 麗華 (青森県・六ヶ所高校)  |
|  岡田 瑠衣 (福島県・磐城桜が丘高校) |  河田 悠 (茨城県・水戸第二高校)  |
|  太田 諒 (福島県・磐城桜が丘高校)  |  下園 愛心 (福井県・福井南高校)  |
|  |  前川 央乃芽 (福井県・福井南高校) |

#### ● ファシリテーター

- 伊藤 結  
(宮城教育大学 初等教育教員養成課程3年)
- 安本 真也  
(東京大学大学院 情報学環  
総合防災情報研究センター 特任研究員)
- 藁谷 愛未  
(株式会社エイブル)

# ふくしまハイスクールアカデミー2023

## 研修目的

社会問題を「自分事」化することで主権者意識を高め、共感力・協働力や表現力、多様な意見を尊重する力などを身につけるとともに、世界の直面する課題と福島の復興の重要性を国内外に発信することを目的とします。

## 本研修での3つの課題

- ① 高レベル放射性廃棄物の最終処分に関する技術や政策について、2つの地域(日本・スウェーデン)の現状と将来を調査する。
- ② 日本(福島県)の現状をスウェーデンの皆さんに伝える。
- ③ スウェーデンで学んだことを持ち帰り、日本での最終処分のあり方を考え全国(世界)に発信する。



# スウェーデンと青森・福島へ

# 核のごみ処分の行方を追って!



## 青森・福島編

## スウェーデン編

### ■ 8月2日(水) 青森県六ヶ所村到着

福島、北海道、青森、茨城、福井から集合  
日本原燃  
PRセンター見学→



←むつ小川原国家  
石油備蓄基地・  
メガソーラー見学



←日本原燃・  
増田尚宏社長  
(元東京電力福島  
第2原発所長)  
講話



青森原燃  
テクノロジー  
センターで結団式→



### ■ 8月3日(木) 日本原燃・原子燃料サイクル施設見学

見学開始



低レベル放射性廃棄物貯蔵埋設センター  
高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター  
使用済燃料受入れ貯蔵施設

六ヶ所村  
出発→



広野町到着

### ■ 8月4日(金) 東京電力福島第1原発見学

東京電力福島第1原発見学  
5号機使用済み燃料プール乾式キャスク  
保管場所など↓



東京電力小野明副社長講話↓



バスで福島から羽田へ移動

### ■ 8月6日(日) ストックホルム

ストックホルムのホテル周辺散策



ホテルで国内視察振り返り・プレゼン作成↓



### ■ 8月7日(月) オスカーシャムへ

バスでストックホルムからオスカーシャムへ エスボ岩盤研究所見学




坑道見学↓




## スウェーデン編

### ■ 8月8日(火) キャニスター研究所見学

キャニスター研究所見学



オスカーシャム市長と対談↓



ランチミーティング↓



バスでウブサラへ移動  
↓振り返りとプレゼン準備



### ■ 8月9日(水) フォルスマルク最終処分施設見学

フォルスマルク最終処分施設見学



エストハンマル  
自治体職員と交流↓



←駐スウェーデン大使と意見交換



ホテルで振り返り・  
プレゼン最終準備↓



### ■ 8月10日(木) ヴァッテンフォール高校訪問

ヴァッテンフォール高校訪問



英語でプレゼンテーション→



高校生と日本文化(折り紙、習字、  
けん玉、こま)で交流↓




### ■ 8月11日(金) ヴァッテンフォール社訪問

ヴァッテンフォール社訪問



急ぎよ2回目の英語で発表



←レストラン



第1部 1班 発表

# 研修を通しての 貴重な体験

- 発表高校生  
野田 麗華(六ヶ所高校)  
太田 諒(磐城桜が丘高校)
- ファシリテーター  
伊藤 修太(寿都高校)



## ◆日本の現状を知るために

私たちは研修を通して、スウェーデンと日本の研修に行ってきました。研修の目的は日本の高レベル放射性廃棄物の最終処分に関する技術や政策の現状を知ることでした。1日目は青森県の原燃PRセンターに行き、原子燃料サイクル施設の役割と仕組み、ガラス固化体が作られる過程などを学びました。2日目は日本原燃を視察し、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターや燃



処分サイトでは、核燃料廃棄物の管理をしているSKB社の職員、ハンナさんから、住民への情報の伝え方とコミュニケーションの重要性を教えてくださいました。

最後に訪れたヴァッテンフォールの高校生との交流は特に印象深いものでした。私たちはまず、住んでいる場所、日本のエネルギーの現状、日本とスウェーデンの最終処分の違いについて英語でプレゼンをしました。スウェーデン研修の目的の1つとなる大事なプレゼンだったので、すごく緊張しました。その後「一緒に考えよう」をテーマに質疑応答を行いました。私たちが質問した1つ目は、スウェーデンの人々がエネルギーについてどう思っているかです。スウェーデン

料貯蔵プールなどを見学しました。高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターではガラス固化体が保管されている前まで行き、コンクリート堀によって放射線がきちんと遮蔽されていることを身をもって感じてきました。

3日目は福島第一原子力発電所を見学しました。バスで構内を回りましたが、汚染水やALPS処理水が入ったタンクがたくさんありました。1号機付近の高台からは数百メートル先にある1〜4号機を見ました。十数年たった今でも当時の面影が残っており、廃炉の難しさを感じました。5号機では実際に建屋に入り、使用済み核燃料貯蔵プールを見学しました。見学を通して放射線量の数値が低いこともわかりました。軽装で安全に敷地内を見学できることや廃炉の現状を多くの人に知ってほしいと思います。



## ◆スウェーデンの取り組みを学ぶ

次にスウェーデンでの研修について説明します。今回の訪問の目標は2つあり、その1つは地層処分の技術が進んでいるスウェーデンの取り組みを学び、日本の最終処分のあり方について考え全国に発信することです。2つ目は日本の原子力やエネルギーの現状をスウェーデンの皆さんに知ってもらうことです。

研修で私たちが訪れたのはオスカーシャムのエスポ岩盤研究所、キャニスター研究所、フォルスマルク最終処分場予定地、ヴァッテンフォール高校です。ストックホルムからオスカーシャムまでバスで3時間半、オスカーシャムからフォルスマルクまでは約4時間と長距離の移動でした。エスポ岩盤研究所では、地下300メートルまで行き実際に研究で使われた機械を見ることができました。次にキャニスター研究所を見学しました。キャニスターは使用済み核燃料を保存する蓋つきの容器です。ここでは銅製のキャニスターや、非破壊検査の様子を見学しました。また写真撮影が許可されていることから、情報がオープンだと感じました。フォルスマルク最終

## ◆研修で印象深かったこと

(太田) 研修で私が一番印象に残っていることは、スウェーデンのエネルギー事情です。ほとんどのエネルギーが自給できていることがすごいいいと思いました。また太陽光発電や風力発電など環境に優しいエネルギーの割合が高く、カーボンニュートラルに近い状態を感じました。

(野田) 私は、日本原燃の使用済み核燃料プールが満杯に近い状態であるということが印象に残っています。このままでは原子力発電所を動かさなくなってしまうそうです。今回はたくさん場所を実際に見ることができて貴重な2週間でした。学んで終わりにするのではなく、これから正確な情報を発信できるように勉強し続けます。



は冬の寒さが厳しく、エネルギーは欠かせないからこそみんなの関心が強いという意見が印象に残っています。2つ目は原子力や最終処分の正しい知識はどのように得ているかという質問です。彼らは子供の頃から原子力について学び、わからないことはインターネットで調べるだけでなく、企業に直接聞きに行くという回答でした。その後、スウェーデンの電力事情についてヴァッテンフォールの高校生がプレゼンをしてくれました。最初は水力がメインだった発電は1980年代から原子力が増え、近年では水力と同じくらいだそうです。重要な電力源だからこそ、その処理について責任をもって考えるのは大切だと思いました。

第1部 2班発表

# エスポ岩盤研究所から 学ぶ魅せ方の工夫

- 発表高校生  
大川 夏輝(磐城高校)  
大井 紀葉(原町高校)  
下園 愛心(福井南高校)
- ファシリテーター  
藁谷 愛未(株式会社エイブル)

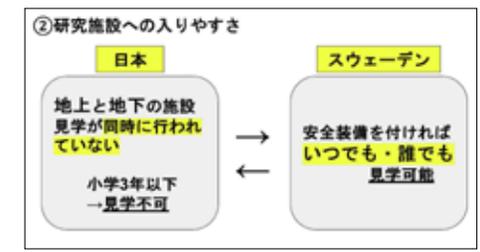


## ◇日本とスウェーデンの違い

私たちはエスポ岩盤研究所の見学を通して感じた魅せ方の工夫について発表します。最初に日本とスウェーデンの岩盤研究所の比較をしたいと思います。エスポ岩盤研究所と比較



する日本の研究所は、高レベル放射性廃棄物の地層処分に関する研究を行っている北海道の幌延深地層研究センターです。日本とスウェーデンの違いとして感じた点は主に3つあります。1つ目は坑道の広さです。写真を見ると日本の地下坑道よりスウェーデンの地下坑道のほうが広いことがわかります。2つ目は研究施設への入りやすさです。日本の研究所では地上施設の見学と地下施設の見学が同時期に行われていません。また小学3年生以下の人は見学できません。一方、スウェーデンの研究所はいつでも見学でき、安全装備をつけられれば小学生以下でも入れるそうです。3つ目は研究所への関心を高める取り組み



です。スウェーデンの研究所では毎年、坑道を使って市民も参加できるマラソン大会が開かれるそうです。エスポ岩盤研究所に入って感じたことは、広いスケール感です。また、銅製のキャニスターを入れた状態の穴や、まだ入っていない状態の穴、さらにキャニスターを穴に入れるための大きな機械を見ることができ、処分までの流れがより理解できました。



## ◇ユーモアと工夫ある取り組み

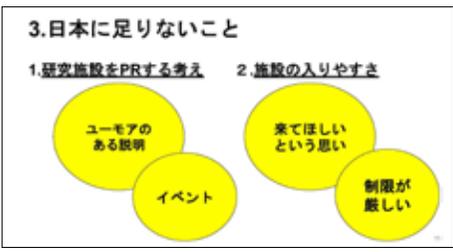
スウェーデンの研究所で一番印象に残ったのは、ユーモアのある説明と取り組みです。少しでも興味を持ってもらい、記憶に残してほしいという工夫がされていると感じました。また、地下450メートル地点の地下水をお土産として持って帰ることもでき



ました。職員の方が大丈夫だよと言って、地下水を舐めるといふ貴重な経験もしました。味覚を使った体験でも記憶に残りました。

次に、日本の幌延深地層研究センターに感じたことです。私たちは行ったことがないため、実際に行った経験がある方にインタビューしました。深地層研究センターは、キャニスターなどの模型はありましたが、エスポ岩盤研究所ほど規模は大きくありませんでした。見学は研究のついでに見せているという感じがして、説明は専門用語が多く、わかりにくい伝え方のように感じました。このことから、私たちは日本に足りないことを2つあげました。1つ目は研究施設をPRするという考えです。スウェーデンでの取り組みは驚きとユーモアのあるもの

でした。伝えたい、知ってほしいという強い思いが伝わりました。日本の研究所は公式サイトからVRを使った見学ができ、思い立ったらすぐ、実際には入れないようなところまで見ることができるといい良い面もあります。しかし、五感を使って実際に見たという経験はわかりやすく、記憶に残りやすいため、より重要視されると思います。日本でも、もっと優しく興味を持ってもらうものにするために、イベントを行うなど工夫する必要があります。2つ目は施設の入りやすさです。スウェーデンでは職員の方がいつでも来てほしいという思いが強いのではないかと考えました。日本では知ってほしいという思いは公式サイトなどから感じられませんが、見学は研究の合間で、あまり推奨していないという雰囲気を感じたという声は私たちの周りからは上がっていません。これはあくまで聞いた内容なので私



私たちも実際に行き判断するべきだと思っています。ただ施設に入れる範囲、人数などが決まっていることからハードルの高さは高めません。もう少し入りやすくすることはできないのでしょうか。

## ◇最終処分の理解を深めるために

まとめとして、魅せ方の工夫は記憶に残りやすく、より詳しく知りたいと思うきっかけになるのではないかと考えました。詳しく調べる人が増えると、知識を持った人が増え、理解度の上昇が期待できます。スウェーデン研修で改めて感じたのは、日本の最終処分問題はまだまだ多くの課題を抱えているということです。最終処分の理解を深め、自分事として考える人が増えれば、問題解決のために多くの力を借りることができると思います。問題を解決しなければ、そのしわ寄せは我々高校生の世代に来ます。もちろん高校生のうちから知識をつけ、関心を持つことも大事です。しかし、今社会を変えることのできる大人が日本の課題を知らなくていいわけがありません。人々が知識をつけるきっかけとなるのは、施設の取り組みからではないでしょうか。

第1部 3班発表

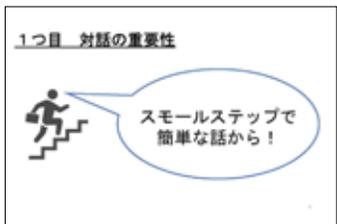
# コミュニケーションの重要性

- 発表高校生  
鹿山 成美(原町高校)  
蛭名 翔大(寿都高校)
- ファシリテーター  
伊藤 結  
(宮城教育大学 初等教育教員養成課程 3年)



## ◇対話で大切な3つのキーワード

私たちはSKB社で最終処分に関する地域住民とのコミュニケーションを担当しているハンナさんという女性の話が一番印象に残りました。特に印象深いことは4つあります。1つ目は対話の重要性です。スウェーデンでは、住民に高レベ



ル放射性廃棄物について説明する際、最初から難しい専門用語を使って技術的な話をするのではなく、段階を踏んで話します。例えば、最初は10分くらいの短い時間で簡単な話から始め、その後15分、30分、1時間と時間を伸ばしていきます。何度も対話を行うことで住民の知識のレベルを上げていくことができるとおっしゃっていました。

また、対話をする上で大切なキーワードも教えてくださいました。ペイシエント(忍耐)、グッドシューズ(良い靴)、そしてコミュニケーションの3つです。なぜこの3つが大切かというと、ペイシエントは住民の知識のレベルを上げるために長い時間がかかることに加え、反対派の人とも感情的にならずに対話し信頼を得るには忍耐が必要だからです。グッドシューズはたくさんの住民を訪ねて話すために丈夫な靴が必要になるため、そしてコミュニ



ケーションは、聞き手の意見も聞きながら対話をするべきだからです。

2つ目は情報の透明性です。これが重要であると何度も強調していました。しかし、情報の透明性とは何なのか私たちはまだよくわかっていません。だからこそ皆さんにお伺いしたいです。皆さんが考える情報の透明性とは何ですか? 3つ目は住民との信頼関係を築くために、伝える側が自分の立場を明確にすることです。自分たちが何を、どのように行うのか、なぜ行うのかを伝え、反対する人にも事実を中立の立場で伝えています。4つ目はハンナさんの人柄です。言語の壁を感じさせない親しみやすくない親しみやすくない雰囲気があり、その一方で、核のごみの処分に責任を持って真摯に取り組む情熱的な一面や、反対派の人たちにも冷静に対応できる面も持ち合わせていました。

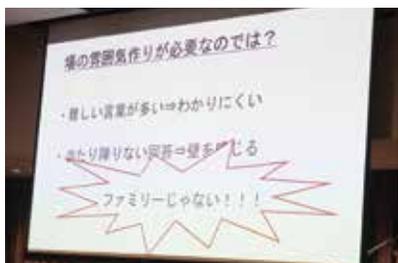
過去10年間のエストハンマルでの高レベル放射性廃棄物の最終処分場建設に対する



支持率を示しています。これを見ると8割ほどの支持率を維持し続けていることがわかります。これはハンナさん流のコミュニケーションのおかげだと考えられます。

## ◇伝え手と聞き手のキャッチボール

コミュニケーションとは、言葉はもちろんアイコンタクトや身振り手振りも含め、相手と意見や気持ちを伝え合うことだと私たちは考えています。コミュニケーションをするには聞き手とのキャッチボールが不可欠です。私たちはただ教えてもらうだけではなく、対等にコミュニケーションできる関係築きたいと思っています。そのためにはまず、場の雰囲気をつくる工夫が必要です。



日本で聞いた話は難しい言葉が多く、一方的に話したいことだけを話しているような印象を受け、本当に理解してもらいたいのか疑問に思う内容でした。また私たちが質

問しても、当たり障りのないマニュアル通りの回答が多く、広報の方との間に壁を感じました。ハンナさんがまるでみんなのママのような人だったのとは違い、雰囲気がい硬い印象でした。

しかし、海外に行ったことよって感じた日本の良さもあります。それは、日本人は責任感があり、仕事を全うする人が多いことです。また大雑把でなく、細かい部分まで入念に説明できる力があります。このような日本人の細やかさを生かすことで、より良いコミュニケーションにつながるのではないかと思います。



## ◇伝える工夫で課題解決へ

最後に、こちらの資料は日本とスウェーデンの資料です。皆さん、どちらが見やすいでしょうか。スウェーデンのほうが見やすいと感じる方が多いと思います。日本の資料は伝えようとする熱意は伝わりますが、

文章や画像が多く、どこを見ていいかわかりません。対してスウェーデンの資料は写真が2枚だけで、私たちに何を伝えたいのかすぐに理解することができません。日本は聞き手に理解してもらおうことを意識せず、一方的に説明したいことを盛り込んでいくような印象を受けます。スウェーデンは聞き手に伝わることを意識し、視覚的にもわかりやすく、話の内容がすんなり入ってきます。日本はコミュニケーションをする上でもっと工夫するべきです。まず、これらの問題を解決しなければ、最終処分は進まないのではないのでしょうか。



第2部 パネルディスカッション

日本の高レベル放射性廃棄物の最終処分地はいったいどこへ？



● コーディネーター

安本 真也(東京大学大学院情報学環  
総合防災情報研究センター 特任研究員)

● 高校生パネリスト

- 大屋 昊平(六ヶ所高校)
- 河田 悠(水戸第二高校)
- 伊東 聡太(相馬高校)
- 岡田 瑠衣(磐城桜が丘高校)
- 中山 凌空(寿都高校)

研修の動機と印象に残ったこと

**安本** まず、ふくしまハイスクールアカデミーで学びたいと思ったのはなぜか、その動機についてお話しください。



大屋 昊平(六ヶ所高校)

**大屋** 僕はもとも、日本で高レベル放射性廃棄物の最終処分地が決まらないのはなぜかというのに興味を持っていました。スウェーデンに行けば最終処分地決定までの流れを知ることができ、それを日本に重ねれば、今何をすべきなのかかわかるのではないかと思います、今回の研修に参加しました。



河田 悠(水戸第二高校)

だったので、研修を通して知識を蓄えたくて参加しました。

**伊東** 僕は将来、まちづくりに関わる仕事に就きたいと考えています。スウェーデンは最終処分地の選定の先進国であるということ、住民の方との対話の方法や、信頼関係の形成の仕方を学びたくて参加しました。



伊東 聡太(相馬高校)

**岡田** 私は世界規模で議論されている問題や、それに対応する国と国の協力という分野に興味がありました。今回スウェーデンという、実際に現地に行つて自分の目で見て感じるということに魅力を感じて参加しました。



岡田 瑠衣(磐城桜が丘高校)

**中山** 僕は去年も参加していて、福島県の浜通りと寿都町の生徒がそれぞれの地元で交流をさせていただきました。そこから興味湧いてきて、今回も参加しようと思

ました。自分の地元が文献調査などで関わりがあるので、もつと知りたいたいということもありました。



中山 凌空(寿都高校)

**安本** 寿都町は今、高レベル放射性廃棄物最終処分場の選定にあたって文献調査の段階にあります。まだ決まったわけではなく、調査を先に進めるか揉めているような状況になっていきます。なので、この後のディスカッションについては、日本でそうした高レベル放射性廃棄物の最終処分場の選定を進めるためにはどうすればいいのか、そのために何が必要なのかを、スウェーデンの経験を踏まえて議論していただきたいと思っています。

まず、日本とスウェーデンの研修で印象に残ったのはどのようなことでしょうか。

**大屋** 私がスウェーデンで一番印象深かったのは、スウェーデンは日本に比べて簡単な言葉や資料を使って物事を説明している、知識のない人にも親切だなと思ったことです。

**河田** 私が一番印象に残ったのは、対話の重要性です。SKB社は対話を重んじているという意見がほぼ全員の方から出ました。

それを聞いて私は、全員が言うくらい重要なことなのだなと思います、とても印象に残りました。

**伊東** 僕は対話と信頼形成に興味を持っています。スウェーデンでは受け身じゃなくて能動的に、話を聞いてほしい人の家に行つてそこで話をしていました。自分から動く姿勢が日本とは少し違うなと思って興味深かったです。

**岡田** 私が一番印象に残ったことは、行動力が素晴らしいことです。SKB社の社員の方が高レベル放射性廃棄物についての討論を何度も繰り返していたり、忙しい方に話をする際には、その方の職場に赴いて話をしたりと、行動力がすごいなと感じました。

**中山** スウェーデンではいろいろな場所に行きましたが、そこで説明してくれた人たちがほぼ同じことを言っていたことが印象に残りました。例えば、写真を撮ることができるよとか、SNSを用いて情報をオープンにしているということを多く聞くことができました。

最終処分を進めるために日本で必要なこと

**安本** では研修を踏まえて、これから日本で高レベル放射性廃棄物の処分を進めるた



めに何が重要だ  
と思いますか。  
一言でお願いし  
ます。

**大屋** 僕は地元  
の人の理解が一  
番重要だと思  
います。

**河田** 私は地元  
の人との対話を  
通して理解を深  
めることが大事  
だと思います。

**伊東** 僕は知識が一番大事だと思います。

**岡田** 私が一番大事だと思うのは対話です。

**中山** 僕は住民の理解が一番大切だと思います。

**安本** では、どうしてそのように思ったのでしょうか。

**大屋** 僕は六ヶ所高校に通っているのですが、同じ高校の生徒と原燃の話をする、原燃を発電所と誤っている人が結構いるんです。知識がないのに原燃を悪く思っていない、むしろ好印象を抱いている人が六ヶ所には多いんですね。それにプラスして、

**安本** では、なぜ知識が大事だと思ったのですか。

**伊東** まず前提として、知識がないことは悪いことではないと思っています。ただ、誤った情報をSNSで発信し、何百万人の人に見せるのは罪だと思えます。なので、今国民に必要なのは、正しい情報、知識をしっかりと自分で信頼のあるところから得ることだと思います。政府や関連の事業をしている企業の方も、知識を与える場を全国で設けてほしいと思っています。

**岡田** 知識がない状態で、この情報は誤っているとは判断できないですよ。そこはどうすればいいんですか。

**伊東** 根拠のある事実を例えば国や、東電や原燃、NUMOのような企業がしっかりとSNSやホームページに載せて、それを見れば安心だと思わせるようなことをやってほしいと僕は思っています。

**河田** 正しい情報を企業などが教えて、全国規模で知識を身につけてほしいとおっしゃっていただんですが、全国となると規模が大きいので、情報を正しく教えるためにかなりの時間がかかるのと、コストややり方も考えていかなければいけないと思うんですけど、その点について考えはありますか。

**伊東** 僕が住んでいる福島県の中でも間

スウェーデンで学んだことの一つで、住民が企業に対して信頼しているから任せても大丈夫だというようなことがあり、企業への信頼感という意味で地元の理解が重要だと思いました。

**中山** 今、文献調査が行われている寿都町は、賛成派の人でもあれば反対派の人もいるという状態です。意味がわかっていないのに、周囲に反対派の人が多くからという理由で反対だと言っている人が多いと僕は考えています。そのような人たちに理解してもらわなければならないので、住民の理解が一番大切だと思います。

**伊東** 寿都町にはNUMO(原子力発電環境整備機構)の支部があったと思いますが、NUMOから対話の機会というのは何か設けられていないのですか。

**中山** 僕はNUMOの方が寿都町に馴染んでいるとは正直、思っています。その理由として、NUMOの事務所があることはわかっています。そこで何が行われているのか、何があるの



違った情報を持っている人は少なからずいます。それが全国規模になったらもっと増えていくと思うんです。なので、少しでもいいからきちんとした情報を、知識を与えることが大事だと思っています。スウェーデンのように小さなことから積み重ねていく、長い目で見るというのが大事だと思うので、そこは大人の方が頑張ってくれることを期待して、お願いしたいです。



**大屋** 僕はSNSやインターネットで反対派の人の意見を見たんですが、言っていたことは、彼らはそもそも政府や東京電力に信頼がないんです。そういう人たちに情報を出しても、言っていることが信じられないというところになると思うのですが、どうすれば信じてもらえるようになるかと思いま

**伊東** それは正直、ぼくもまだわからないです。皆さんに質問したいんですけど、逆に何を信じれば正しい知識をつけられると思いますか。

かというのは僕もわからないし、住民の方もわかっていないのではないかと思えます。僕はNUMOの方にお願ひしたいのですが、町長さんとか、町議会の人たちで1〜2か月に1回対話の場があることは調べたのですが、そこに町民の方も入って交流できるようにしてほしいと思います。

**大屋** 住民との対話が大事ということはおっしゃっていただくと、これからの世界を担っていく高校生など若者に対する出前授業のようなものも必要なのかなと思いましたが、どう思いますか。

**中山** 僕も出前授業は必要だと思います。でもその前に、このような研修に参加している人たちが、通っている高校などで発表することが最初なのではないかと思っています。

**大屋** 僕が思い描いていた出前授業は、中学校や高校にNUMOの方々が行って、簡単な説明からして、次の週は少しだけ難しいことに触れたりするような感じかなと思ったのですが、学校に行く出前授業のようなものも考えていますか。

**中山** 僕はしてほしいんですけど、実際行われていないのが現状です。NUMOの方たちになるべくそのような時間をつくっていただけることが大切だと思います。

**安本** 会場の方には最後にコメントをいただければと思います。では、信頼醸成には何が重要だと思えますか。



**伊東** やはり対話が一番大事だと思っています。スウェーデンでは対話を40年重ねてきたんですけど、対話をずっと積み上げて今の80%という賛成派がいると思います。長い期間を経てやっと賛成を得たので、日本もそれを実践していくべきだと思います。

**岡田** 私が対話が必要だと思うのは、対話において自分と異なる意見を持つ人が出てくると、意見が良い方向に変わるのはいくつかあることだと思っています。自分の意見を口に出して、それをみんなと共有することを日本でもするべきだと思います。なので、対話の場を設けることは一番やらなくてはならないことだと感じました。

**河田** 私はあまり知識のない人たちとの対話も大事だと思います。そういう人たちとコミュニケーションをとって、対話を重ねていくことで知識が増え、そこから信頼を

得られて、地元の方たちの理解につながると思っと思っています。

**中山** 寿都では対話の場が前までは行われていたのですが、今は減ってきているというのを感じるので、NUMOの方や町長さんへのお願いで、全員が関われるような機会を設けてほしいと思いました。

**伊東** 対話の醸成についてはですが、スウェーデンはもともと原子力に関してマイナスイメージを持っていかなかったんです。でも日本は、原爆や原子力事故、東海村の事故のような大きな事故があったことで、国民はほとんどの人が原子力に対してマイナスのイメージを持っていると思います。



**大屋** 寿都町に夏に行ったときに、カキやバジルが有名だという話を聞きました。最終処分地になった場合、そこに風評被害がいくのではないかと思ってしまうのですが、どうお考えですか。

**中山** 調査をしていく上でお金をもらえたりしているの、それを地域振興に使ってもらえたらと思います。風評で一番被害を被る産業の人たちには、お金だけではなく、ほかの支援もするのがいいのかなと思っています。

**大屋** 例えば漁業の人だったら、生活の営みを奪われる形になってしまわないか、そこを失った人たちにはどういう支援が必要だと思いますか。

**中山** 支援に関しては、お金だけでは賄えないことはわかっているんですが、それ以外のことは今ちょっと思いつかないです。

**伊東** 正直、自分の地元で最終処分地が決定したら、快く首を縦には振れないと思います。福島は原発の事故があってから十数年、ずっと苦しんできたわけです。そういう中で最終処分場が置かれたとしたら、また風評被害が必ずあると思います。もうこれ以上苦しみたくなないので本当は作ってほしくないんですけど、でも、こういう言い方はしたくないのですが、浜通りは一

す。そして、タンクはもうほとんど満杯なんです。それをやるうとするとあと20年ぐらいしかないの、短い期間でどうやってスウェーデンのように対話をしていくべきだと考えますか。

**岡田** スウェーデンでは国やSKBの方がたくさん頑張って小さな対話を続けながら努力を積み重ねて今のようになっていくんですけど、日本はそれをやってきたとしても、私たちには見えていないんです。だからNUMOの方も実際に顔を見せて説明をするということが大事で、それもまた信頼関係につながると思います。何がしたいんですか、率直な疑問です。



**安本** これも後でコメントいただきますしゅう。

**河田** 私は話の透明性も大事だと思っています。透明性がなければ私たちの理解につながらないと思うので、NUMOの方には頑張ってほしいと思います。

度汚染されてしまった地域ではあるんですね。それは事実なので、汚染された地域に汚染されたものを置くというのは、合理性としては一番理にかなっているのかなと思います。本当は置いてほしくないけど、それが国のため、社会のためになるのなら、僕は許容したいと思っています。

**大屋** 浜通りは事故当初、住めなかった地域もありました。でも今は徐々にそういうところもなくなって、戻ってきている人たちがいるんですね。数が少ないから民主的に見たら弱い立場の人たちなんですけど、最終処分地になってしまったら、そういう人たちをさらに傷つける形になるのではないかと思えます。それについてはどう思いますか。

**伊東** 最終処分地になったところは、どうしても被害を受けてしまうと思います。そこで思うのは先ほども出ていた知識の問題で、今は国民に知識がないから風評被害が起きているのだと思います。なので、そこは政府や企業の皆さんが国民にしっかりと知識を授けて、風評被害を最小限化させてほしいと思っています。

**大屋** 日本には1億人くらい人口がいて、知識を持っていない人が多いと風評被害に苦しむ人がいると思うんですけど、そんなに大勢の人たちに知識をつけるためには具体的にどのようなことをすればいいと思いますか。

### 自分が住むまちが最終処分地になったら

**安本** ではもう一つのテーマに移りたいのですが、もし自分たちが住んでいる地域が最終処分地の選定になると決まってしまうたら、自分はどう反応するかということについて議論していきたいと思っています。

**中山** もし地元が選定されたら、僕は賛成です。理由としては、寿都町は今文献調査が進んでいることもありませんが、原子力発電は日本全国いろんなところで行われています。福島の原子力発電所では事故があつて、風評被害とかいろいろあつたと思うんですが、福島の人の問題ではないと考えています。原子力でつくられた電気はいろいろなところで使われているので、日本全体として考えなければいけないので、僕は賛成します。

**伊東** 全国的な問題だという話ですが、寿都町は原子力関連の施設は今はないですね。そう考えたときに、今原子力施設がある地域に置くという考えもあると思うんですけど、それについてはどう考えますか。

**中山** 今ある施設に置くとしたら、処分場ができるまでいいと思っています。処分地が決まったらそちらに持っていくほうがいいと思います。

**伊東** 今回の問題は、たぶん40年、50年、60年と、僕たちの代だけじゃなくて子供孫の代までずっと引き継がれていくような問題だと思っています。なので、その引き継ぎができるように政府の方々もしっかりと整備していただければいいかなと思います。

**河田** 汚染された処分地を置くとなると、ほかの地域よりもより一層反発が大きいのと思うし、その分、説明も支援もほかの地域よりも大切だと思っと思っています。どういった説明や支援が大事だと思えますか。



**伊東** 今の状態でも政府や企業の方々は説明を熱心に行っていると思いますが、そこを僕たちにも知らせしてほしいと思います。

**岡田** 私は署名活動をしてでも、なるべくなら自分の地域に置かれることは避けたいという思いがあります。でも、やはり先送りにできる問題ではないし、どこかには置かなければいけないという課題になってい



るので、そこは素直に受け入れて、自分たちの地域に置いてやっただぞという誇りを持つことも一つの手段だと思っています。その後の風評被害の心配ももちろんあると思いますが、そこは置いてくれてありがとうという感謝の気持ちを持つという意識に変える必要があると思います。ほかの県の方々にそこはお願いしたいです。

**大屋** 感謝の気持ちをみんなに持つてもらおうという意見は素晴らしいと思うんですけど、それはスウェーデンですら40年くらいかかったという話でしたよね。日本は原発とか福島事故が積み重なって、やはり悪い印象があるし、もともと風評被害は日本独特のものでもあると思うんですけどね。それを払拭してありがとうと思ってもらうのは、20年くらいしか時間が残されていない中で現実的に難しいんじゃないかなと思うんですけど、そこはどう思いますか。

**岡田** 長い年月をかけて努力を積み重ねて

はないかと思えます。

**伊東** 僕たちはこのような素晴らしい研修を通して、最終処分に対して知識を持つことができたと思います。でも、まだ持っていない人のほうが大半だと思います。このような研修は何回も開くことはできないと思うんですけど、これを縮小化して、より広く、少しでも知識を持ってもらうことを意識して事業に取り組んでいただけたらとても嬉しいです。頑張っていたいただきたいです。

**岡田** 私は今回の研修を通して、こんなにも原子力について意見や考えを持っている高校生がたくさんいるんだなということに改めて感じました。だからこそ、スウェーデンで行っているような小さな小さな対話を繰り返し続けていくことは、地道で効果はすぐには見られないかもしれないけれど、真剣に取り組む上でとても大事だと気づきました。

**中山** 僕は今回の研修に最初は行く気はなかったんです。でも地元である寿都を変えたいには行かなくてはいけないという気持ちもあって参加しました。実際に行ってみると初めて知ることが多くて、自分も成長することができました。

**安本** ありがとうございます。これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。

きたスウェーデンと違い、日本には時間があまりないという点では私もそう思います。でも風評被害はあってはならないものだと思っているので、そこは大人の方々にもしっかり議論を重ねてほしいと思います。

**河田** 私は正直、今の日本の対話の仕方そのまま処分の選定が進むのであれば反対です。SKBとNUMOを比較して話すと、SKBでは人とコミュニケーションをとる、直接話す、小さい会話をしていくというのを重んじていて、だからこそみんなから理解を得られていたり、顔を覚えられているんですね。ですが、NUMOのほうでは顔も覚えられていないのと、今文献調査が進んでいる寿都町でもNUMOについて知らない人がいたり、私自身NUMOについて知ったのは今回の研修が初めてでした。それくらい認知度が低いので、それで選定を進めると言われても、私たちは何を受け入れたらいいかわからないです。何が進んでいるのかはつきりわからない状態のまま進むのが私は嫌なので、反対です。

**岡田** 顔を覚えられていないという点から言うと、やはり人って第一印象がすごく大事だと思います。スウェーデンでお話をされていた方は明るくて、身振り手振りや表情が豊かで、自信を持って話している感じを受けました。でも、日本で説明をしてくれた人は、何か怒っているような感じで、硬い印象だったんですね。質問に関しても、

### 大人へのメッセージ

**安本** ありがとうございます。名残惜しいですが、最後に、こういう機会なので大人たちに向けて、研修を通して感じたことを一言ずつお願いします。

**大屋** 日本は、透明性という部分は結構頑張っていると僕は思うんです。例えば原子力のPR施設を建てたり、トリチウム水でのヒラメの飼育実験をYouTubeでライブ配信したりして、安全性がわかりやすいと思います。ですが、専門用語が多すぎて、実際に話を聞くと難しいと思ってしまうんですね。だから説明するときには相手が大人でも、小学生や中学生にもわかるように簡単な言葉を使って説明することを考えてほしいと思います。

**河田** 私たちはこの問題にまっすぐ向き合っているのに、大人の方たちは答えづらい質問が来たらうまくかわすのではなく、質問にまっすぐ向き合う気持ちで答えてほしいです。そうしたらもっと良くなるので



講 評

私が福島県の復興に携わり、現場主義を心がけてやっている中で、大事にしているのは「情と理」ということです。「理」は理屈、ロジック、正確な知識ですね。「情」は感情の部分です。

今日の中で、「対話」「コミュニケーション」がキーワードであったと思います。スウェーデンと比べて日本の堅苦しさ、政府資料のわかりにくさといった指摘がありました。政府の至らなさと反省します。ただ難しいのが「理解」です。「理解醸成」と政府は言いますが、現場の方々からすると、上から目線で教えてやるというスタンス自体が気に入らないと感じられるのではないかと思います。本当の「対話」、対等の立場での「コミュニケーション」はどうあるべきか、が今後ますます重要になってくると思います。最終処分しかり。一部のよく考えている人だけでなく、国民全体にどうやって広めていくのか、これが本当に難しい。



● 新居 泰人様

(内閣府 福島原子力事故処理調整総括官)

高校生の皆さん、お疲れ様でした。政府に耳の痛い話をたくさんいただきました。居並ぶ諸先輩方がいらっしやる中ですが、一言申し上げます。

何よりも素晴らしいかったのは、高校生の皆さんが、これだけまっすぐに、難しい課題について、自分の足でス



● 馬場 雄基様

(衆議院議員 福島2区)

皆様、2時間半にわたる本当に多くの議論、お疲れになったのではないでしょう。私たちが目のやり場に、耳となり、五感をフルに使っているいろいろな研修をしてきてくださった高校生の皆さんに、心から感謝を申し上げます。誰もが経験できることではなかったからこそ、皆さんが背負っている責任というのは、ある意味人一倍重いものがあるのではないかと思います。経験できていない子供たちがたくさんいる。あるいはそれを知らなかった大人たちもたくさんいる。そういった中で皆さんがしっかりと一人一人に伝えていくという責任をもって行動していただきたいと思います。

今日お話を伺いながらずっと考えていたのは、正しいということとは一体何だろうということ。今皆さん方が思っている正しいということ、私たちが感じている正しいということが本当に正しいのでしょうか。「正しい」には2つの側面があると思っています。まっすぐにがむしゃらに知ろうとする、学ぼうとする本気の意思と、失敗を許容できる安心できる空間をそこにつくるということ。この2つの両面が重なったときに正しいということにつながるのだと思います。これは実は私の言葉ではないんです。前回ここで字ばせてもらったときに、琴乃さんがしっかりと5文字のひらがなで私たちに教えてくれました。それは「つむぎあい」だったと思います。紡ぎあっていくその空間の折り重なっていった先に初めて、みんながこれは正しいんじゃないかと思う、その境地にたどり着くのだと私は



思ったんですね。だからこそ今日この空間は本当に大事で、大人の皆さんは耳が痛かったかもしれないですが、失敗を許容する空間をつくり、そして安心できる空間を大人たちがつくっている。そして本気で挑もうとする子供たちがいた。この魂と魂のぶつかり合いだったからすごくいい空間だったのではないかと私は思いました。

今、私は国会議員で最年少という立場ですけれども、国会で行政の皆さん方には真正面から魂を込めてぶつかりたいと思っています。行政の皆さんはそこにまっすぐに返していただきたく思っていますし、民間は民間の責任を、そして学生の皆さん方には変わらないぶつかり方を期待して、この会の御礼とさせていただきます。皆さん本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

人間、頭で理解しているだけではだめで、心に響いて、自ら腹落ちしてやっとアクションにつながる。共感の部分です。目の前の一人には自分の感情が伝えることはできる。しかし目の前の一人だけではだめなんです。日本の1億2000万人の国民の皆さん、さらには世界の皆さんに伝わらなければいけない。一生かけても何億人の人と話をすることはできない。それはどうするか。そこで「理」です。皆さんがおっしゃる「つむぎあい」、正確な理解をどうやって広げていき、長くつないでいくか。今の世代、次の世代、皆さんから見ると孫の世代までかかる話です。日本というエネルギーのない国で、世代を繋いでいかなければいけない。それを今、先送りせずにやる。ALPS処理水の件も多大なご不安をおかけしながらやってまいりましたが、先送りできない。廃炉を完了させて福島県の復興を実現する。廃棄物の最終処分も含め、一番難しい問題から逃げずに、「情と理」をもって「現場主義」を貫く。これを政府も心がけたいと思います。そして、高校生の皆さん、今日の発表にあったように、今後もしろんな立場になっても、この問題を考えようじゃないかという気運ですね。期待したいと思います。

今回も、西本理事長をはじめ関係者の皆様の多大なご尽力。多くの方々の支えがあったて実現できたのだと思います。私も勉強させていただきました。ありがとうございました。



# 「当事者として伝えること・伝わること」

## 「コミュニケーションと当事者としての発信」

磐城桜が丘高等学校 太田 諒



### 「スウェーデンでの コミュニケーション」

私は、「ふくしまハイスクールアカデミー2023」を通して、高レベル放射性廃棄物の処分について、特に『情報の発信』が重要であると感じました。スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社(SKB社)は、地層処分の研究や処分地の選定を行っています。SKB社が管理する施設を幾つか見学しました。その一つであるオスカーシャム自治体にある地層処分の研究を行っているエスポ岩盤研究



所では、地下360メートルを約90秒で降下できるエレベーター

が設備されており、そこから地下約450メートルまで地下道が見学できるようになっています。この見学は施設が受け入れ可能であれば、いつでも見学ができ、安全装備が装着できれば、小学生以下でも見学できるということです。見学通路の途中には、使用済核燃料を封入する実物大の「キャニスタ」が展示されていたり、キャニスタの周囲に使用される緩衝材である「ベントナイト」に触れることができたりしました。実際のキャニスタを運搬する作業車両やキャニスタを定置する縦穴も展示されていて、見学者の興味を引きつけるような施設だと感じました。また、最後の地下450メートル地点では、湧き出る地下水を見学者がお土産として持つて帰れることもで



る地下約450メートルから地表までのマラソン大会を開催するなど、いつでも、誰でも受け入れる体制が整っていて地域住民の関わりを大切にしながら広報活動を行っていると感じました。このように、日本でもスウェーデンのSKB社のように情報の発信が必要不可欠になると考えます。

### 「コミュニケーションと 信頼の醸成」

スウェーデンから学んだことは、国や関係機関が正確な情報を遅延無く、隠さずに国民に対して発信することが重要だということです。エストハンマル自治体のフォルスマルクにある中低レベル放射性廃棄物処分場の近くの最終処分場建設予定地の事務所では、SKB職員のハンナさんからコミュニケーションの重要性を聞くことができました。以前、SKB社が処分場を決める際に地元住民に説明せずに調査を開始したところ、住民から猛反発され関係性がうまくいかなかったこと



の反省から、今のSKB社のコミュニケーション

ンが構築され、住民との関係性が良好であるとの話を伺いました。コミュニケーションの手段としては、広報誌に加え、SNSを利活用して幅広い世代に伝えているのとことです。その他にも、住民の対話の場や施設見学の開催、学校への出前授業など様々な取り組みをしているそうです。日本でも、ただメディアを通じて一方的に情報を提供するのではなく、経済産業省やNUMO(原子

力発電環境整備機構)が主体となり関係機関が、関係する地域の学校や企業、団体などが集まっている場所に自ら訪問し、説明会や出前講座を実施するなど、時間をかけた地道な活動が必要であると考えます。ハンナさんから、コミュニケーションで大事なのは初めのきっかけづくりであると同じでした。具体的には、初めに住民の自宅や職場に訪問する時、「5分、10分で良いですから時間を割いてください」と説明する。そして、2回目は15分、3回目は30分、60分と回数を重ねながら時間を延ばして、住民との関係性を構築していくことです。少しずつ徐々に信頼を得ながら、住民の知識レベルを上げていくことに専念しているようです。その際に大切なことは、辛抱強く、歩き回り、対話を重ねるというフレーズと、反対派にも紳士的な態度で対応し、とにかく時間をかけて活動しているとの話が特に印象に残りました。日本ではどうしても、一度に多量の情報を伝える傾向がありますが、



この機会に変えていく必要があるのかもしれない。次に、スウェーデンで数人のSKB職員から講話(説明)を聞いたとき、「話し方」や「スライドの表現」が日本での講話とはかなり異なり、聞いている私たちの理解のしやすさが全然違うことを身をもって体験しました。まずは「話し方」については講話への入り方です、我々が日本人(外国人)であったからかどうかは分かりませんが、飲み物の物やお菓子が用意されていて、飲みながら(食べながら)気楽に話を聞いてくださいと言う。このような場の雰囲気づくりがまさに大切だと感じました。SKB職員は、「対話を重視した講話であったのに対し、日本では、講話が一方的であり、「対話」とはとても言えないものであったと感じました。日本では、講話や説明会という物音一つすら出していない雰囲気があります。質問するのめためらうような感じがあります。

もしかすると、話者も質問が出ないように完璧に話をし、質問を受け付けないようなオーラを出しているのかもしれませんが。このあたりも改善の余地がありそうです。そして、「スライドの表現」では、SKB社の端的なスライドでは見出しの単語1語と写真が2枚の（スライド1）で説明がなされていました。日本では、文字がどうしても多いスライドになっているのは周知のことでしょう。文字が多いと、どこに焦点を当てたらいいのか分からず、理解が進まなくなることがあります。そのため、日本でも誰にも同じスライドで一律な講話をするのではなく、伝えたいことを取捨選択して何を伝えたいか、そして何を理解してほしいかなどを絞り、相手にあったスライドを作成、説明し、聞き手に伝わるわかりやすい講話を行っていくべきだと思います。それによって、多くの人がその情報に興味を持ったり、理解を深めたりすることができると思います。ですから、スウェーデン研修後の報告会では、発表する生徒全員が、「わかりやすいスライドの表現」を意識して発表に臨みました。

パーで会った時にも気軽に会話ができる環境が構築されているなど、ハンナさんの人間性（プロ意識）にも魅力を感じました。そのため、発信者の人間性も重要であると思いました。そこで、日本ではどうなのか、後日、NUMOに問い合わせたところ、広報の人材育成にも取り組んでおり、ハンナさんの様なNUMO職員もいるとのこと。今後、是非その方の講話を聞きたいと思います。また、文献調査している寿都町と神恵内村の住民との交流については、神恵内村の全戸訪問は実施しているが、寿都町ではできていないとのこと。この差は何なのか、考えていく必要があります。

### 一若い世代の理解醸成

私たち若者世代も高レベル放射性廃棄物について、積極的に考えていかないといいと思います。現段階では最終処分地の調査関係だけで20年、更には処分場建設に10年程度かかる考えると、議論から実際の処分が始まるまでには30〜40年かかることになるかと推測できるので、もはや先送りのできない課題であると考えられます。このことから、私たち世代も必ず直面する事象なのです。もしかすると、対応していた先輩達がいなくなり、突如、私たちの世代が対応するかもしれません。ですから、スウェーデンでの学びを



基に、私も情報の発信に努めていきます。今までは「伝えたこと」が相手に「伝わったこと」になると思っていました。情報が聞かれた人が内容を正しく理解して初めて「伝わったこと」になることが分かりました。まずは、友達や親戚などの身の回りの人に発信していきます。その際、相手に適した説明の仕方で相手に正しく情報が伝わるように注意深く意識します。私は部活動の一環で、県内の高校生だけでなく、他県の高中生や同世代との交流する機会があるため、福島県の災害や復興への道のりを含めて、廃炉に関連した高レベル放射性廃棄物の処理問題についての情報を伝えていきます。同世代だけではなく、幅広い世代の人にも伝えていき、多くの人に自分事として考えてほしいと思います。

## ●特集……………2

# 新たな考え方と『自分ごと化』

先の見えない未来のために現状と向き合う

原町高等学校

大井 紀葉



### 一研修を通して感じた日本

今回の研修の目的の1つに、スウェーデンのヴァッテンフォール高校生に「日本とスウェーデンのエネルギーの現状」について伝えるということがあった。この準備をする中で、私は「今の日本のエネルギー自給率は極

端に低い」という事実には大きな危機感を感じるようになった。

私たちの生活になくはならない電気。日本は、他国からの輸入に頼る化石燃料をもとにした火力発電が7割を超えている状況である。しかし、化石燃料は限られた資源であり、将来資源が少なくなれば間違いなく輸出量は減っていくだろう。すると何が起ころるか。資源が

乏しい日本に化石燃料は届かなくなり、発電ができなくなってしまう。この近い将来起こりうる最悪の事実こそが、感じた危機感の正体だろう。

私は今回の研修を通して、「日本の未来に、原子力発電は必要だ」という1つの考えにたどり着いた。「核のごみの最終処分」をテーマ

にした研修だったが、少ない燃料で大量の電気を作り出すことができる原子力発電の良さにも気づかされた。もちろん、再生可能エネルギーで電力を賄うことも自給率を上げる1つの方法だろう。しかし、国土が狭い日本では、自然環境や天候、場所を多く必要とする再生可能エネルギーだけで日本全体の電気を賄うにはいくらなんでも限界がある。このことから、原子力発電を一定以上取り入れた電源構成が、これからの日本には必要になるものだと考えるようになった。

原子力発電を必要だと考えるならば、「最終処分場」も自ずと必要になると言



える。しかし、日本は場所が決まっていな  
 どころか、選定の第1段階である文献調査す  
 ら断る自治体があり、文献調査を実施した自  
 治体でも足踏みの状態が続いている。本当に  
 それでいいのだろうか？原子力を増やす・  
 増やさないに関わらず、日本は今までの原子  
 力発電で出た「核のごみ」をため続けている。  
 そして、保管施設の収容量にも限界が来てい  
 る。あと何年とたたず限界突破がみえる今、  
 最終処分場選定は早急に進めなければなら  
 ず、先送りできない問題である。

## 「日本とスウェーデンの 考え方の違い」



スウェーデンの高校生との交流で、特に印  
 象に残っている回答がある。それは「自分の生  
 活に電気は必  
 要で、無くては  
 生きられない  
 から原子力に  
 関心がある」と  
 いうものだ。私  
 は、これは日本  
 人には、ほとん  
 ど無い考え方  
 だと思ってい  
 る。電気があっ  
 て当たり前。

私たちはそう思い込んでいた。しかし、電力自給率の低い日本では、果たして本当に  
 そう言えるのだろうか？自分たちの発表も  
 相まって「この考え方は日本とスウェーデン  
 で大きく違う部分だ」と強く実感させられた。  
 また、スウェーデンでは、最終処分場を決  
 める際にいくつかの自治体の手を挙げ、最終  
 的にフォルスマルク、エストハンマルの2つ  
 に絞られた。最終処分場に決定したフォルス  
 マルクでは、「自分たちがスウェーデンの核  
 のごみを保管し、国の未来を左右している」と  
 いうことに『責任』と『誇り』を持っている」と  
 自治体職員の方々が口をそろえて話してい  
 た。また、選定に漏れたエストハンマルでは、  
 悲しみのあまり地元スパーパーで「なぐさめ  
 セール」が行われたとのことだった。このこ  
 とからも、最終処分場に手を挙げたこれらの  
 自治体が、どれ

ほどまでに最  
 終処分場が欲  
 しかったのか  
 ということが  
 伝わると思う。  
 残念だが、これ  
 は今の日本で  
 は考えられな  
 いことだ。確か  
 に、スウェーデ  
 ンは地震も少



なく、原子力事故は起こっていない。対して  
 日本は、原子爆弾や福島第1原子力発電所な  
 どの原子力事故を背景に、原子力に対して負  
 のイメージを持っている人が少なくない。加  
 えて、地震などの自然災害も多く、この先の  
 未来も何が起こるか分からないと不安を感  
 じている人が多いように思う。しかし、いく  
 ら状況が違くともスウェーデンの考え方を  
 持つことは日本でもできるのではないだろ  
 うか？オール電化、機械化が進むほど優れた  
 技術を持つ日本では、電気は必要不可欠なも  
 のだ。これまで通りの電気を作り出すには、  
 原子力発電の利用も避けては通れない。する  
 と最終処分場も必ず必要になる。自分の地域  
 に最終処分場を作り、日本のエネルギーの將  
 来を牛耳るということに「責任」と「誇り」を  
 持つという視点も必要なのではないか。

## 「日本における原子力と 『自分ごと化』」

ここまで、日本には原子力発電が必要だと  
 話してきたが、それ以上に必要なことがあ  
 る。そもそも原子力発電に対して賛成・反対  
 の意見が出ることは、人それぞれの価値観に  
 違いがあるため普通のことだ。私は原子力発  
 電過激派ではないため、否定派をねじ伏せて  
 賛成派にしようなんてことは全く考えてい  
 ない。では、何が必要なのか？

私は、「自分の生きる先に、電気がある確証  
 はない」ということを「自分ごと化」して考え  
 るべきだと考える。この根底には、日本が発  
 展したが故の電気に頼った生活を送ってい  
 るということがある。日本人が今の生活に慣  
 れ、この先もつと便利な生活を送りたいなら  
 ば、より一層電気は必要になる。しかし、今  
 の日本は将来的に不利な状態である。そのた  
 め、このことを国民一人ひとりが「自分ごと  
 化」として捉え、それぞれが意見を持ち、可能  
 な限り行動に移すことが求められる。電気を  
 使っている以上、国民全員がこの問題に関係  
 していると、言っても過言ではない。つまり、  
 電気の将来を「自分ごと」として捉えるのが  
 当たり前のはずなのだ。しかし、今はそうで  
 は無い。意見を持たずに、ただ電気があるの  
 が当たり前と生きている人は問題があると  
 言えるだろう。

また、少し論点はズレるが、原子力発電に  
 ついてあまり知らない、憶測で意見を述べて  
 いる人についても考えを見直してほしい。今  
 の考えが、正しい情報をもとにした確固たる  
 意見なのか、はたまた自分の印象が作り出し  
 た空想の産物なのか。現状を知れば知るほど  
 「原子力発電は放射線云々があるから危険」  
 で済む時代では無くなってきているはずで  
 ある。その事実と向き合った上で、賛成・反  
 対の意見を発信してほしいと思う。

## 「今、そして未来の私にできること」

多くの人が日本の抱える課題について「自  
 分ごと化」するために、今の私ができること  
 は、この研修で実際に見聞きした、経験した  
 何にも勝らないこの真実を武器に、自分の意  
 見を持ち続けること。そして、できる範囲で  
 情報を発信することだ。

日本もスウェーデンも実際に働く職員の方  
 々が話した内容には説得力があり、その思  
 いがひしひしと伝わってきた。そう感じたの  
 は「その業界で実際に働いている」という事  
 実のうえで話を聞いたからだと思う。つま  
 り、実際に経験した私たちの目・口・心が発  
 信する情報も相当な価値があるはずだ。しか  
 しながら、いくら情報を発信するといえど  
 も、簡単に多くの人に届く訳はない。そう  
 であれば、世の中にインフルエンサーが大量  
 生じているに違いない。本当の意味で人に意  
 見が伝わるためには、聞く人がその意見を  
 「自分ごと化」できることが不可欠である。私  
 たちは高校生という子どもと大人の狭間を  
 生きている。そのため、子どもらしい素直な  
 部分と、大人らしい現実的な部分を兼ね備え  
 た意見を出せると思う。この絶妙なラインの  
 意見を出すことができる今の私たちこそ、聞  
 く人に「自分ごと化」を促す新たな発信源と  
 なる可能性を秘めているだろう。

最終処分場決定が足踏み状態の日本におい

て、間違いなくそのしわ寄せは大人になった  
 私たちに押し付けられる。何より大事なことは、  
 先の見えない問題に対して、「自分ごと化」  
 をやめずに、意見を持ち続けることだ。これに  
 は、常にアンテナを張りながら、知識を深める  
 こと。自分の考えだけでなく、友達や周囲の人  
 の賛成・反対を含めた様々な意見も聞き入  
 れることが必要だ。中立的ながらも「自分の意  
 見」を持ち、現状と先の未来について考えてい  
 くことをやめない自分でありたい。

私の将来の夢はまだ明確にはなっていない  
 が、地域の人々に寄り添い、住む人がより  
 良い生活を送れるような仕事に携わりたい  
 という気持ちがある。この研修で得た何にも  
 代えられない経験と自分の意見を大切にし  
 ながら、人や自分の未来のために生かしてい  
 ける大人になりたいと思う。



# 最前線 ～この目で確かめる～

## 「先進地スウェーデンに学ぶ」、「青森・福島の現状報告」

自分の目で確かめたい。原発関連施設のある福島、北海道 青森 茨城 福井の高校2年 13人が2023年の夏、北欧の国スウェーデンと青森県六ヶ所村で進む高レベル放射性廃棄物の関連施設を巡った。東京電力福島第一原発事故発生後、多くの人が改めて原発について考えるようになった。原発から出る廃棄物をどう処理するのかは、世界的な問題だ。「自分事としてどう捉えるか。16歳、17歳の夏、日本原燃の核燃料サイクル施設とスウェーデンで進む岩盤研究や最終処分場建設に向けた取り組みを探った。実際に現場を歩いた自分たちだけでなく、世代を超えた多くの人と共有したい。そんな思いで、スウェーデンと国内の施設を紹介する。この問題について考えるきっかけになれば、と願う。

### 先進地スウェーデンに学ぶ

#### エスポ岩盤研究所



地下深くに坑道がある。最も深い所で約460メートル。最も急な所で、傾斜は40度。岩盤の地層から何万年も前のバクテリアやキノコなどが発見されており、科学的な研究にも使われている。毎年マラソン大会が開かれるなど、地域と距離感が近い。出口の所でお土産用の地下水が置いてある。試飲もでき、その味は……。



#### キャニスター研究所

最終処分の際に使用済み核燃料を入れるふた付きの容器「キャニスター」を研究している。腐食に強い銅製で、エックス線や超音波を使ってふたの溶接に問題がないかなどを研究している。研究所前には、実際のキャニスターが設置されており、上に乗って記念撮影できる。



#### フォルスマルク最終処分場建設予定地



スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社(SKB社)が最終処分の建設から運用までを担う。広報担当のハンナさんから説明を聞いた。近くにはフォルスマルク原発がある。

#### ヴァッテンフォール高校

ヴァッテンフォール社が運営する高校。生徒の家族の多くが原子力関係会社に勤めている。寄宿制。日本の高校生は3班に分かれ、日本とスウェーデンの最終処分に向けた現状や違いなどを英語でプレゼンテーションした。ヴァッテンフォールの生徒の発表もあった。折り紙、習字、けん玉、こまを紹介し、日本文化で交流を深めた。生徒が暮らす寄宿舎を見学したり、卓球をしたりして、同世代同士、国境を越えて絆を強くした。



#### ヴァッテンフォール社



欧州最大規模の電力会社。同社の再生可能エネルギーの取り組みなどについて説明を受けた。高校生が英語で発表した。

# スウェーデンを歩く

## 旅のエピソードⅠ 夏の風物詩

8月のスウェーデンでは、ザリガニ漁が解禁され、夏の風物詩となっている。日本のウナギだ。スーパーには専用のコーナーが設けられ、パーティーグッズもある。通り沿いのレストランに、ザリガニの絵も見受けられる。探してみよう！



## 旅のエピソードⅡ おやつ時間



「Fika(フィーカ)」。スウェーデン語で仕事や家事を中断し、甘い物を口にしながらかoffeeや紅茶を飲むことを言う。英語の「COFFEE」を反対にした。まるで業界用語？単なるcoffeeブレイクではなく、重要な意味を持つといわれる。仕事の集中力アップ、上司や同僚とのコミュニケーション向上に効果があるという。

## 旅のエピソードⅢ 土産選びのポイント

観光地ガムラ・スタンでまとめてお土産をゲットするのが効率的。人気は馬の置物だが、高め。かわいらしいキーホルダーやマグカップ、手提げ袋などがオススメ。「PRC」と書かれているのは、「中華人民共和国(People's Republic of China)の略」なのでご注意ください！



## 写真グラフ「絵本の世界へようこそ」



「絶景」  
観光地のガムラ・スタンに行ってみよう。どこを撮っても絵になる風景ばかり。大広場での写真は記念の一枚になること間違いなし。



「魔法の宅急便の舞台」  
ジブリ映画の舞台になった街。海に面した高台になっている。観光客であふれる中、最も細い道と言われているモテントローツィグ・グレンを見つけよう。



「ノーベル博物館」  
ガムラ・スタンの中心地にある大広場にある。「ストックホルムの血浴」が起こった場所。1776年建造の証券取引所がノーベル博物館になった。ノーベルの肖像入りチョコレートなど限定グッズを販売している。

「銅像と1枚」  
街のいたるところに銅像がある。一緒に撮影すれば思い出の一枚に。スウェーデンの歴史を間近で見よう。



## 「データで知ろう 北欧の風土と文化」編

### ■気候

8月の気温は15度前後。40度近くにもなる福島の半分ぐらいの気温。寒暖差にご注意を。雨が降ると寒いくらい。上着は持参すべし。



### ■距離・時差

日本との距離8000キロ。乗り継ぎを含め16時間の長旅のため、飛行機の中での過ごし方は工夫が必要。時差はサマータイムを含めマイナス7時間。



### ■食

ライ麦パンが有名。朝食は日本と同じビュッフェ方式で、ベーコン、生ハム、スクランブルエッグが並ぶ。レストランは高め。スーパーは「COOP(コープ)」は日本と同じ庶民の味方。お菓子や飲料水の買い出しに便利。配り用のお土産なら、ここで大量ゲットも。



### ■物価・通過

日本よりだいぶ高い。電子決済が最も普及した国ともいわれ、キャッシュレスが進んでいる。通過はスウェーデンクローナ(SEK)。2023年8月時点で、1 SEK が 13.42円。紙幣に日本でも知られる「長くつの下ピッ」が描かれている。



## ハンナさん

SKB社の広報担当。最終処分場の場所選定に向け、過去の失敗を教訓に長い時間をかけて、住民に説明を重ねてきたという。重要な点として「ベイシエント(忍耐)」「透明性」を挙げた。何度も足を運んで信頼を得るために「グッドシューズ」も必要と。分かりやすい言葉で伝えることの



大切さも強調した。生徒たちは分かりやすいハンナさんの話にすっかり魅了された。

## スウェーデン大使

能化正樹駐スウェーデン大使はスウェーデンのエネルギー事情や文化を紹介した。外務省、外交官の仕事を紹介した上で、燃料や技術の面から原子力と外交の関係を説明。日本産食品に関する輸入規制の撤廃に向けて取り組んできた。日本人に似ているスウェーデンの国民性にも触れた。生徒と輪になって、気軽に質問に答えていた。お菓子を食べながら話をするスウェーデン文化のフィーカも紹介した。



## 日本原燃

「低レベル放射性廃棄物埋設センター」「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」「使用済み核燃料受入れ・貯蔵施設」の各施設がある。原子力発電所で使い終えた使用済燃料をリサイクルするための「再処理工場」の試験運転、「MOX燃料工場」の建設を進めている。高レベル放射性廃棄物を再処理したガラス固化体を貯蔵する管理センターで、ガラス固化体の上に立つことができる。PRセンターは再処理の工程を、展示物で解説している。



## 東京電力福島第1原発

原発事故で溶け落ちた核燃料(デブリ)への注水や建屋に流れ込む地下水、雨水により大量に汚染水が発生する。多核種除去設備(ALPS)で浄化するが放射性物質のトリチウムはのぞけず、処理水として敷地内のタンクに保管している。東電の試算では2024年2～6月に満杯になるため、政府は処理水を海水で薄め、8月24日に放出を開始した。敷地内では処理水を使ってヒラメやアワビを飼育し、放射性物質の影響を調べている。今後、デブリ取り出しに向けた研究が進む。



## 最前線 この目で確かめる 青森・福島 の現状報告



## スウェーデンに学ぶべきことは ～対話重視の姿勢と若者の教育～

対話を重視する背景には過去の苦い経験がある。処分地選定に向けて動き始めた当初、2自治体で調査を始めたが、住民に説明することはなかった。結果、住民投票は反対多数となり、SKB社は撤退。この失敗が

### ■失敗の過去 必要なのは「いい靴」

SKB社員は86%という数字について「住民の信頼を得たことを示している」と誇った一方、「プロセスには時間がかかる」とも説明した。スウェーデンでは原発事故が起きたことはなく、原発に対しては信頼があるが、廃棄物となると別の話になる。ただ、廃棄物がなくなることはない。長年の苦勞をのぞかせた。

### ■地元の賛成86% 対話を重視

スウェーデンでの最終処分の実施主体である「スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社(SKB社)」が毎年行っている調査によると、2023年には最終処分場建設予定の地元で86%の人が最終処分の実施に賛成した。地元住民や社員が最終処分への信頼を得る手段として挙げたのは「住民との対話」「情報公開による透明性の確保」「若者への教育」だった。

## 約40年前から最終処分に向けて取り組んできた スウェーデン。日本が学ぶべきことは多い！

ら、住民との対話を重視するようになった。

それ以来、説明会に参加できない人のためには職場に行き、説明し、納得しない人がいれば家に伺い、意見を聞いた。広報担当者は「信頼を得るには(説明に赴くための)いい靴が必要」と言った。処分場建設予定地のフォルスマルクがあるエストハンマルの市長は「人は理解できないものを怖がる。どのように行つか、誰が責任を持つかをはっきり説明すれば理解は進む」と話した。



SKB社が対話、引いては広報を大切にしていることは、日本の高校生に対する対応からも明らかだった。各施設で生徒を案内した社員3人はいずれも広報に就いて10年以上のベテラン。資料は簡潔で、説明を聞く側との会話のための一つの手段にしていた。説明する上で、最初は難しい話をせず、少しずつ知識をつけてもらうことを意識しているという。

一方、研修で高校生が訪ねた日本の原子力関連施設の広報の仕方は、スウェーデンとは対照的だった。資料には難解な言葉が

原子力発電所を稼働してきたことで、日本でもすでに使用済み核燃料がたまり続けている。しかし肝心の処分地が決まっていない。

### ■先進地スウェーデン 30年代後半に開始見込み

日本では、使用済み核燃料を再処理して、利用できるウランやプルトニウムを取り出す「再処理」をしてから、残った廃液をガラスに混ぜ、ステンレス製の容器に入れて高レベル放射性廃棄物として地下300メートル以深に処分する方針だ。原子力発電環境整備機構(NUMO)が実施主体となる。

スウェーデンは最終処分場建設予定地が決まっている先進地だ。首都ストックホルムから北に約120キロ離れたエストハンマル自治体にあるフォルスマルク。スウェーデンの原発で発生した使用済み燃料は、フォルスマルクの地下約500メートルの岩盤に処分される。スウェーデンは日本と違って、再処理をせず、使用済み核燃料を銅製の容器に入れて埋める。

スウェーデン政府は2022年、電力事業者4社が共同出資して設立した「スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社」(S

## 高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分は 原発稼働の賛否にかかわらず、避けては通れない問題だ！

KB社)の最終処分事業計画の実施を承認した。実際に最終処分が始まるのは、2030年代後半と見込まれている。

### ■先行き不透明な日本 待ったなしの現状

一方、日本では2020年から、北海道の寿都町と神恵内村で処分地選定に向けた第一段階である文献調査が行われているが、先行きは不透明な状態。2023年9月には文献調査への応募を検討していた長崎県対馬市が「市民の合意形成が不十分」と応募しない方針を示した。

経済産業省によると、2023年現在、日本には全国に約1.9万トンの使用済み核燃料が存在する。各原発などで管理されているが、全施設の管理容量は約2.4万トンで、貯蔵量は約80%に達していることになる。最終処分の問題は先送りできないところまで迫っているが、国全体での議論には至っていない。

高レベル放射性廃棄物は私たちが電気を使うために生まれる。処分する責任は、これまで電気を使ってきた誰もが負っている。

### ■若い頃からの教育が重要

並び、講義タイプの説明に関しても高校生は「一方通行」と感じたようだ。

生徒が交流した地元の高校生からは原子力発電について肯定的な意見が相次ぎ、エネルギーへの関心の高さがうかがえた。「スウェーデンの若者は原子力について学んでいるから信頼している」「エネルギーなしでは生活できない」「化石燃料を使えば環境に悪影響がある」。

最終処分の研究施設があるオスカーシャムの市長は「若い頃からの教育が重要で、早道はない」と指摘。市内の子どもたちは、研究施設を見学するなど、必ず最終処分に関して教育を受けるという。SKB社員も、若者も将来は最終処分について責任を負うことになる。だから情報を伝えなければならぬ」と強調した。

日本でエネルギーに関する教育はしっかりとされていると言えるだろうか。実際、高校生たちの多くは「研修を通じて日本のエネルギーの事情を初めて知った」と口をそろえた。

核のごみの最終処分、さらには日本のエネルギーをどうまかなうかという課題には国民一人一人が向き合わなければならぬ。議論を進めるには知識を付けることが必須となる。そのために誰もが平等に、エネルギーについて教育を受ける機会をつくることこそ、課題解決に向けて今の日本ができる最良で、最短の道ではないだろうか。

## 高レベル放射性廃棄物 不可避の課題



# （高レベル放射性廃棄物の処分は） 目の前に迫っている課題です

編集後記

M E S S A G E



NPO法人ハッピーロードネット  
理事長 西本 由美子

東日本大震災、東京電力福島第1原子力発電所の事故から12年余りが過ぎました。廃炉作業や処理水の放出に注目が集まる一方で、つまり続ける使用済み核燃料、高レベル放射性廃棄物の処分は目の前に迫っている課題です。被災地である福島県浜通り、地層処分の文献調査が行われている北海道寿都町、原子力関連施設が立地する青森県八ヶ所村、福井県、茨城県の高校生13人が高レベル放射性廃棄物の処分について、「自分事」として捉え、自分たちの未来について考えるため、8月に日本国内とスウェーデンの原子力関連施設を訪ねました。

研修には最終処分に関して何も分からずに参加した高校生もいました。しかし、施設の視察や高校生同士の議論を重ねる中で、最終処分やエネルギーはどうまかなうべきかという課題は、自分たちも向き合わなければならないと気付いたようです。9月に開かれた報告会で、研修で得た自らの意見を、まっすぐなまなざしで発信していた彼らの姿は忘れられません。何事も、子どもたちが気付くきっかけを与えるこ

とは大人の責任だと考えております。高レベル放射性廃棄物の最終処分は、これからの社会を担う子どもたちも責任を負う課題です。今回の研修に参加した高校生は、それを知ることができました。一方で、ほかの多くの子どもたちはどうでしょう。課題を知る機会も与えられずに将来、突然に課題を突きつけられる事態になることを、私は危惧しています。高レベル放射性廃棄物、日本のエネルギーの課題について、子どもうちに知ってもらう機会を提供すること、教育することは、大人が責任を持つべきではないでしょうか。

もちろん課題を解決するための行動もしなければなりません。協力し合って前向きに進めていく必要があります。ただ、国内で最終処分に議論が進んでいるとは言えません。強い言葉で言えば、「見て見ぬふり」をしている節すらあります。「先輩たちはあの時に課題を解決してくれた、解決するために努力してくれた」と子どもたちが将来、誇りに思ってくれるような大人でありたい。「大人にも真剣に向き合ってほしい」と子どもたちは願っています。

私たちはこれからも人材育成事業を続けていきます。学校では学べないことが、あまりにも多くあるからです。子どもたちが将来、必要になる知識や経験を得てもらうために歩み続けます。

企画・発行

特定非営利活動法人ハッピーロードネット  
理事長 西本 由美子

〒979-0403 福島県双葉郡広野町大字下浅見川字築地25-1  
TEL: 0240-23-6172 FAX: 0240-23-6171  
E-mail: office@happyroad.net

協力

経済産業省 資源エネルギー庁 電力・ガス事業部 放射性廃棄物対策課

制作 STAFF

渡部 純 國井 貴宏 日比 賢二 櫻井 隆一

## 私たちが未来を描くためのキーワード

# keyword

- ### 1 対話を重ねる

考え方や価値観は一人一人違う。この先、復興の課題について議論する時には賛成の人も反対の人もいる。互いにその理由を説明し、議論し、理解し合いながら復興の姿を少しずつ形作っていきたい。否定し合うことからは何も生まれない。
- ### 2 自分事として考える

原発事故を防げなかった大人たちの責任は重いと思う。それでも、廃炉までの道のりは長く険しく、私たち若い世代に深く関わる世代を超えた課題となってしまった。みんなが廃炉の問題点を知り、自分なりの声を上げることがより良い未来を創る力になる。
- ### 3 「伝わる」工夫を

「伝える」ことは簡単なようで、実は難しい。情報に接した人がきちんと内容を理解して初めて「伝わった」ことになる。SNSが浸透し、瞬時に世界中に意見を伝える事が出来る世の中になった。年齢など伝える相手の目線に立って情報を発信したい。
- ### 4 風化させない

震災と原発事故の記憶と教訓は語り継いでいかなければならない。将来、もしも同じような災害がどこかで起きた時に、きっと誰かの命を救うことにつながると信じて。私たち若い世代は震災当時は幼かっただけに、「あの日」について学びを深めたい。
- ### 5 挑戦する

東京電力福島第1原発の廃炉は未知の領域への挑戦だ。それだけに、福島から世界に誇れるような新しい技術が生まれる可能性はある。私たちがこれから歩む人生でも必ず失敗に直面する。でも、立ち上がり、前を向き、新たな何かを生み出す力にしたい。
- ### 6 学びの旅に出よう

百聞は一見にしかず。自分の目で見て、確かめることが大切だ。生まれ育った地域の外に出なければ分からないこともある。自分の中の常識が覆る経験をするかもしれない。世界を広げよう。

## 2024年夏、高校生対象のスウェーデン訪問「核のごみ処分の行方」研修



# ふくしま HIGH SCHOOL ACADEMY 2024 開催

特定非営利活動法人ハッピーロードネットは、高校生が海外研修を通して、原子力発電所から出る高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の処分について学ぶ事業を進めています。2024年夏、ふたたびスウェーデンの地を訪ねます。現地で、関係者や住民、高校生から、最終処分場予定地の選定過程や住民理解の醸成などについて話を聞きます。来年の夏、一緒にこの問題について考えましょう！



フォルスマルク最終処分施設建設予定地にて

主催 特定非営利活動法人ハッピーロードネット  
事務局 特定非営利活動法人ハッピーロードネット

〒979-0403 福島県双葉郡広野町大字下浅見川字築地25-1  
TEL : 0240-23-6172 E-mail : office@happyroad.net